

平成十三年十二月十六日（日）

稲神と厄神

越谷市郷土研究会

山田政信

福神と厄神

福とは「さいわい」であり「しあわせ」である。正月の縁起物である福寿草の福と寿はさいわいと長生きであり、福禍という言葉は「さいわい」とその対極にある「わざわい」の併称である。

人はだれでもが望む「さいわい」に対して、「わざわい」は誰もが忌避するところである。禍福は、あざなえる縄の如しという言葉があるように、吉凶、禍福は常に交錯し、人生は決して平坦ではない、しかも人為によつて自在に為されるものではなく、何かそこに大きな人為を超えたところがある。その背後に「さいわい」や「わざわい」をもたらす超人的な神を考えるのも当然であり、福神と厄神の信仰が時代を問わずに人々の心を左右する。

かつての万歳・鳥追い・春駒・大黒舞のような宗教的遊行民は近頃その姿を消しているが、かつては「御厄払いましょう」といって、福神として訪れてきたものです。

今日でも暮れから正月の縁起物に少なからぬ関心を寄せられるのは、どこでも目にするとところであります。

「幸せ」「富」「福」について

「しあわせ」とは、もともとは「仕合はせ」「為合はせ」などと、表記されることにも示されているように、ものごとが一致することや、巡り合わせ、運などを意味する言葉で、かならずしも良い結果だけを意味するものではなく、良くない結果もふくんでいた。古い書物やおみくじには「しあはせ悪し」とか「しあはせ吉し」などといった表現がでてくる。

それが、だんだん「良い運」や「良い巡り合わせ」だけを意味するようになっていったのである。興味深いことには「運」とか「巡り合わせ」が強調されているように、「しあわせ」の觀念には、自分の努力の結果ではなく、むしろその外部に存在する（^{もの}）霊的な存在（^{ちから}）の意志・働きによって、自分の望んでいる好ましい状態がもたらされるのだ、という認識がふくまれていることである。「しあわせ」は、いまだ「仕合わせ」よりも「幸せ」と表記することが多い。これは、「しあわせ」が、繁栄する、好運に恵まれるという意味の「さいわい」（幸い）と同義のことばになったからである。という。

また、「しあわせ」をささえるものは、生存にかかわる「食料」への欲望というかたちで具現化される。「山の幸・海の幸」といわれるように、山野や海でとれる食料を意味する「さち」（幸）がこれにあたる。また、これに関係したことばに「富」という語がある。「富」とは価値あると思われるもの（有用なモノ）の総称である。有用なものをたくさんもっていることが「富んでいる」状態というわけである。かつては神に「良縁」や「無病息災」等を祈願したように、「健康」とか「愛」とか「情」とかも立派な富であったが、現代ではその中身は物質的なものに大きく傾斜し、そうした身体的、精神的状態は「富」とはみなされなくなってきたようである。

「福」という語は、中国ではもと神からさづけられた酒を意味し、それが転じて、神からさづけられた「さいわい」を意味するようになった語であるといわれる。すなわち「福」とは「神」などから直接にさづけられた「富」や「仕合わせ」を意味するという。

たとえば、買った一枚の宝くじで特等が当たったとき、神からさづけられたと思えば、その「富」は「福」ということになるが、偶然にすぎないと思うだけならば、それはたんなる「くじ」というゲームでかちとった「富」にすぎないわけである。

このことは、はっきり神仏などが登場しなくても「福引き」「福袋」「福茶」など、「福」の字を冠したことばの背後には、神的なもの、異界的なもの、神秘的なものが隠されているのであるという。

「幸い」「幸せ」「福」といった問題を考えるときに、常に念頭におかねばならないのは、その反対の概念である。

「さいわい」（幸い）の反対は「貧」ないし「乏」であり、「福」の反対は「厄」、「福神」の反対は「厄神」とか「貧乏神」あるいは「鬼」ということになる。

たとえば、節分の豆まきの「福は内、鬼は外」という唱え言のなかに凝縮されて表現されている。「福」を招くためには「鬼」を追い払わなければならない。すなわち「福」や「富」を考えれば「厄」や「鬼」を考えないわけにはいかない。

「幸せ」とか「富」とかは、なかなかその「かたち」や中身をつかみだすことはできない。仮に私にとって「幸せ」なことが、あなたにとってはそのうでないかもしれないし、あなたにとって「幸せ」なことが、私にとってはそうでないことがしばしばある。すなわち「幸せ」の中身は、人によって、時代によって、異なっているわけである。

さらには「幸せ」は持続的なものとはかぎらず、時間の経過つまり、それに慣れ親しむことによって「幸せ」とは思わなくなってしまうことが多い。そこで、抽象的に「幸せ」とはなにかということ、人間の欲望が満たされている状態ということになるのではなからうか。

江戸の七福神信仰

福の神の登場

日本の民族社会には、どちらかというところ悪い神様、疫病神とか、災厄をもたらすような悪神は極めて少ない。本来、神は人間よりも優れた存在であるという感覚を日本人は持っていました。そういうなかで災厄をもたらすような神の数は、非常に少ないといえるのです。疫病神とか疱瘡神とか、あるいは貧乏神という神格が江戸時代にできました。しかし、人々は、幸いを与える神様だけが好みに合った形で信仰されているという。

「福の神」の名前は、中世の民間信仰の中に現れております。「七福神」という七つの神を合わせて福の神に仕立てるという考え方は、十八世紀あたりに、江戸では一般化しました。

「福神信仰について」 (七福神)

人間の真の幸福とは一体何であろうか。勿論、幸福という概念は、人それぞれに違うが、一に健康、二に金、三に長寿ということになるのではなかろうか。従来いわれている、福・禄・寿の三点セットの実現を宗教的信仰として発展したものが福神信仰であり、いわゆる七福神崇拝を招福の手がかりにしようとする庶民の夢はまた、ふくらむのである。

「一年の計は元旦にあり」で年頭祈願と招福とをセットして、年中行事のトップにおどり上った「七福神めぐり」が各地で盛大に行われるようになり、関心も益々強くなっているようである。

福神信仰の起源や由来については定説はないが、室町時代頃から盛んに行われるようになり、次第に七福神としての形態が定まったようである。室町時代は禅宗がさかんで、その上茶道の流行と相まって、洒落な生活を好む気分がおこり、布袋和尚や、仙人風の寿老人がもてはやされ、扇面、团扇などの絵に描かれるなどして、庶民の間にひろまった。また、この頃同類のものをあつめて、名数的に物を数えることが流行しており、例へば寺院の格式として五山などと称し、禅林にても、五老、七賢などというように、名数的に並べる傾向があった。おそらくこれらのことが影響して、七福神の形態が確立され、絵画等に描かれるようになったものと思はれる。

「七福神」はいろいろな国の文化を巧みにとり入れることに優れている日本人の考え出した福神である。

日本の神、仏教の僧、中国の道教の仙人、仏教の仏などによる七福神は、室町時代に商人に福を授ける神々としての信仰が強まったものである。

七福神の信仰は、のちに観音札所巡りや、四国八十八所巡りの影響で、一定地域の七福神を祀る社寺を巡る巡拝が始った。この七福神巡りは現在もさかんで、新しく構成される所もあり、巡拝の際に朱印やスタンプを捺すだけでなく、それぞれを表す人形や土鈴を集めるなどの趣向も生れた。

この七福神巡りは、都内だけでも、「隅田川七福神」、「深川七福神」、「下谷七福神」、「東海七福神」、「浅草名所七福神」、「新宿七福神」など一六ヵ所を数えるが、この「谷中七福神巡り」は、江戸時代の宝暦年間（一七五一—一七六四）に始まり江戸最古であるといわれる。このコースには江戸初期から、武州六阿弥陀詣でが先行されていたので、その影響は多分にあるものと思はれる。

【七福神の由来】

日本中どんな僻地へ行っても、そこにはかならず神社があり、地域の住民の生活と直結している。神社に祀られている神々の多くは、神話伝説や民話の中に登場するもので「祭祀」という宗教儀礼を通して、一つの共同社会をつくりあげた。それは氏子という共通の意識が基盤をなしている。それが地域を区劃する行政面にまで影響を及ぼしている。「八百萬神」とは、こうした地域住民と直接関係をもっている神々をいったものであるという。

これらの「八百萬神」は、人間の吉凶禍福を司るものとして受け止められてきた。生活上のあらゆる難問を打開するため、福・禄・寿を求め、神頼みするために、祈りを捧げたのである。

福神の数を七に限ったのは、七難七福という仏教経典によるものであると思われる。

それは「仁王護国般若波羅密經」受持品に

南閻浮提には十六大国・五百中国・十千小国有り。その国土の中に七災難有り。一切国王この難のための故に、般若波羅蜜を購読す。七難即滅、七福即生、萬姓安樂、帝王歡喜す。

とあるのがそれである。

七難七福が具体的にどのようなものであったかは、明らかでないが、七難に対応させるため性格の異なった神々を集めて七福神が成立してきたのである。

喜田貞吉著「福神沿革概説」によると次のような異動がある。

「狂言七福神」 恵比寿・大黒・多聞天・弁才天・布袋和尚・福祿寿・寿老人

「日本七福神伝」 蛭子神・大黒天・多聞天・弁才天・布袋和尚・南極老人・（吉祥天）

「七福神考」 恵比須・大黒天・毘沙門天・大弁財天・布袋和尚・福祿寿・寿老人

（註）

（吉祥天）のかわりに（狸々）を入れた時代もあったようである。

七福神の由来は、一説には「般若波羅蜜經受持品」の「購読般若波羅蜜、七難即滅、七福即生、万姓安樂、帝王歡喜」から来たものであるという。しかし、ここにいう七福が何さしているのかは定かではない。七福神は時代によって異なり、寿命・有福・人望・清廉・愛敬・威光・大量とされた時代もあり、今日では一般には恵比寿・大黒天・布袋・寿老人・福祿寿・毘沙門天・弁財天の七神とされている。しかし、これにしても吉祥天や釋迦が入っていたりした時代もあった。しかも、これらの七福神のうち、日本の神は恵比寿だけで、大黒天・毘沙門天・弁財天はインドの神であり布袋・福祿寿・寿老人は中国の神である。

この七福神がめでたいものの代表のようになったのは室町時代末期から安土桃山時代にかけてであるという。このころから七福神は民間に広く信仰されるようになった。

江戸時代になると、七福神信仰は大いに流行り、民間では元日から七日までに七福神を巡拝して、その年の開運を祈願する七福神めぐりが盛んに行われた。

恵比寿・大黒天は商売繁盛の神として江戸庶民の信仰が篤かった。布袋は古代中国の梁の時代の八徳を持った定應大師のことで、大きな腹と笑顔が江戸庶民に親しみを与えたのであろう。寿老人はその肉を食べれば二千年の長寿を得るといふ鹿と人間の寿命を記した司命の巻を杖に結んでいる。福祿寿は寿老人と同様に南極星の化身したものと伝えられる。毘沙門天は古代インドに伝わる仏教の守護神で、武の神として武家階級の信仰が篤かった。弁財天は音楽や知恵の神とされ、娑婆の世界を主宰する梵天王の妃とされている。

現在、東京各地にある七福神めぐりの主なものは谷中、向島、山の手、東海、深川、浅草、日本橋、新宿、亀戸などがある。中でも、最も古いとされるのが谷中七福神で、向島七福神、日本橋七福神、東海七福神なども人気があり、元日から七日までは初詣でを兼ねて多くの参詣人で賑わっている。

江戸風物誌

七福神めぐり

より

【恵比須】

アマノミナカスシノカミ
天之御中主命

タカミムスビノカミ
高御産巢日神

ウミスビノカミ
神産巢日神

ウマシヤカシヒコジノカミ
宇麻志阿斯詞比古遲神
アメノトコタチノカミ
天之常立神

大地の固らない状態のとき

天地創造の時代

国土形成されつつある初めに登場する神々
ニノトコタチノカミ
国之常立神他九神

伊邪那岐

伊邪那美

天照大神・月読命・素戔鳴命・夷三郎

（夷三郎）

前記の二神の国土を生む話の中に、三男の御子のひる子をお生みになった。この御子は葦の葉で造った船に入れて流し捨てられ、摂津西ノ宮の武庫の浦に漂着したという。その後の消息は不明であるが、土地の人びとからは、海から再生した生命であるということとで尊崇をうけ、この地で没したと伝えられる。没後人びとによって、廟が建てられ、現在の西宮神社で、夷三郎は西宮神社の祭神恵比須となって鎮座している。

以上が古事記などによる記述であるが、現在の釣り竿を肩にかけ、脇の下に鯛を挟んでいる姿とは結びつく理由が見当たらず、そこで、他に考えられるのは、海や海岸とゆかりがあることから、後世になっていろいろな他の神々と混同され、現在の姿形が考案され定着したものと思われるという。

その一 天津日高日子穂穂手見命との混同

ニニギノミコト
遷々藝命

コノハサヲフヤヒメノミコト
木花佐久夜比賣命

ホテリノミコト
火照命（海幸彦）
ホスセリノミコト
火須勢理命
アヲツヒコヒコ
天津日高日子穂穂手見命（山幸彦）

海幸彦は、海へ出て獲物を取り、山幸彦は、山へ出かけて狩りをして生活していたが、同じことの繰り返しにあきて、その仕事を交換することを相談した。念願かない、海幸彦は山に出かけ、山幸彦は海に出かけたが、お互いに馴れない仕事で思うような収穫がなかった。また、元通りの仕事にもどることにし、お互い道具を返すことになったが、山幸彦は、釣針を海中に落してしまった。海幸彦は意地悪く強く返却を要求した。山幸彦は、困って海を支配する大綿津見神を訪ね、釣針の件を相談する。大綿津見神のお陰で釣針を持ち帰って海幸彦に返したが、海幸彦は山幸彦が釣針を見つけて留守にしている間に、海の幸を一人じめにしていたので、その悪行が大綿津見神にいらまれて、だんだん魚がつかなくなる。山幸彦は大綿津見神に見守られて、豊作となり、海へ出ても豊漁となった。この物語が、山幸彦、即ち天津日高日子穂穂手見命が恵比須の姿、即ち舟や釣竿、鯛をとり合わせた姿となった理由として考えられる

その二 事代主命との混同

オホフミヌシノミコト
大国主命

カムヤマトニメノミコト
神皇比賣命

コトシロメノミコト
事代主命

天照大神が、建御雷之男神を^{タケミカヅノオホミ}大国主命のもとへ派遣し、出雲の国土を献上するよう進言させた。

当時、政治は御子の事代主命にまかせていたため、事代主命と相談してほしいとのべた。事代主命は、美保の岬へ魚釣りに出かけていたが、使者を出して連れ戻し、その話をする、国土献上することを承諾した。その後、事代主命は海辺で釣りをして余生を送ったとされる。このような物語が、事代主命が恵比須の姿、即ち、釣りする姿となった理由として考えられる。

その三 ^{スサヒコノミナト} 少彦名命との混同

この神は、高天原の神産巢日神^{タカムスヒノミコ}の御子である。御身が小さく、父神の掌の上に乗って遊んでいたが、あるとき、指の間から中国^{ナカノクニ}に落ちてしまい、その後、大国主命とともに中国を治められたという。

この神は、神仙術や酒の神として崇拜され、また、童話の一寸法師の原型ともなったといわれる。

この少彦名命は、大国主命と交際があったことから、大国と大黒とが音通して大国主命を大黒とし、少彦名命を恵比須として一緒に祀り、「エビス・ダイコク」と並称される福神となった。

恵比須の鯛と釣り竿を持った姿は「釣りして網せず」ということで、暴利を貪らぬ清廉の心を象徴しているといわれ、やがて商売繁昌の福神として信仰を集めたのである。商売するに当っては、暴利を貪らず、お客に便利、親切を与えるような清廉な心を持たなければ、繁昌しないという意味からであろう。

古くから商取引の市場にはかならず恵比須が祀られており、今日でも毎月十日は恵比須講といって、商人たちがおまつりする風習がある。

その起源は、インドのヒンドウ教の三神の一つシヴァ神の別名で、名前をマハーカーラという。

釈尊は、大黒天を自由自在な神通力によって、この世に大福德円満自在菩薩・大摩尼珠王如来として顕現し、世の貧窮薄福の者のために、大摩尼珠という宝玉の徳光を輝かして富と財を与えんとしているものだと言われ、とされる。まさに福の神であるということである。また、大黒天は厨房の神であるという説がある。インドでは、台所に祀られ、食事のたびごとに香火とともに飲食が供養されたという。わが国では、この記録にもとづいて、諸寺院では庫院に大黒天を安置する風習が広まったといわれている。

大黒天像は、忿怒の相をしたものや、三面大黒、跽大黒など多様であるが、今日一般に、みられるものは頭に頭巾をかぶり、手には打出の小槌を持ち、二俵の俵を踏んだものである。これは時代の変遷のうちにさまざまに信仰から自然とつくりだされた形であって、どのような形像が正しいか一概にいいない。一説には、頭に大きな頭巾をかぶっているのは、上をみるなということ、謙虚であるべきことを教え、二俵の俵の上にいることは、二俵で満足せよという「知足」の戒めを表現しているともいわれる。

さらに、日本では出雲の国を治めた、大国主命の「大国」と「大黒」の音通が習合して信仰されるようになった。その信仰は正月などのめでたい時節に、大黒の頭巾をかぶって各家を訪れる門付芸人を生み、これらの人達が家ごとに大黒像や面を授けする風習も行われた。

大黒天が七福神としての性格としては、手に持った打出の小槌と米俵ではないだろうかという説もある。即ち打出の小槌の「ツチ」は、大地の「ツチ」に通じる。物はすべて大地より出る。宝石も作物も土から出るであろう。大黒天が「ツチ（槌）」を持つのは、「ツチ（土）」から宝を生ずる意である。この「タカラ（宝）」とは、「田から出る」からだという説である。宝は何が宝かというと、人間の命にまさる宝はない。この命をつなぐものは何かというと、田から出る米である。だから「田から」という。

土（槌「ツチ」）から宝を打ち出すという意味から、大黒天は、豊作の神、財福の神とされている。

大黒天

大黒天はインドの神で、中国を経て、日本に伝来した。インドの大黒天は、武神あるいは吸血鬼のたぐいとしての属性をもつとされる一方で、台所の神として、寺の台所の柱のそばに祀られていた。その神像は、丈が二、三尺（約六十―九十センチ）という小さな体で、顔かたちは三面六臂、手には金袋をもち、いつも油でふかれるために黒色になっていたと説明される。

日本では、天台宗の開祖の最澄が、この厨房の神としての大黒天を日本にもちこみ、天台宗の寺院の厨房で、「三面大黒」として祀ったのがはじまりだという。

天台系寺院の台所の守護神であった大黒天は、台所の守護神として民間に受容されていった。つまり、台所にはつねに食料が満ち満ちているということを保証する神として民衆のあいだに浸透していったわけである。大黒天の姿が破顔・肥満になっていったのも、台所には飲食物が豊富にある、ということを物語っているのである。

したがって、民俗学者の宮田氏が、大黒天がもたらす繁栄・富は、家を単位にしたものであり、当初は台所の大黒天の祀り手が、必然的に台所仕事をする女性たちであったと推測しているのもうなずける。

寺の住職の妻を「お大黒さん」というのも、こうした背景があつての呼称である。家をささえる太い柱を「大黒柱」といい、さらには一家の家計をささえる人を大黒柱にたとえるのも、家の守護神＝福神としての「大黒天」に由来しているのである。

大黒天信仰は、大筋においては、天台系諸寺院の台所を介して、民間の家々の台所に浸透するという形で、「家に富（米その他の食料）をもたらす守護神」として民衆のあいだに受容されていた。しかし、恵比寿の場合には、海産物を交換する市を介して、商人たちの間に浸透し、それが「商売繁盛をもたらす守護神」として商家をはじめとする民間の家々に受容されていった。

近世の江戸では、商家が十月二十日を恵比寿の祭日と定めて、「二十日戎」といってこれを祝うとともに安売りなどをした。これにたいして、関西では、正月十日の恵比寿の縁日に、恵比寿を祀る摂津の西宮神社や大阪の今宮神社に、「十日戎」と称し、多くの商人たちが参詣して「福」をさずかろうとした。ここには、恵比寿信仰のあり方がしめされているとともに、その浸透・展開の過程の違いも物語られているといえる。

これらの、出自のきわめて対照的な「福」をもたらす二神は、室町時代中頃には、民衆から福神の代表とみなされ、やがて家のなかでセットになって祭祀されるようになった。

そして、恵比寿も大黒天も民間におおいに受容されるにつれて、当初の「富」にこだわらず、どんな「富」でもさずける神になっていくのであるが、それでも、神像においては、その出自を暗示する姿をとどめつづけたのであった。

【弁財天】

七福神のなかでただ一人女性の神で、一般に弁天さまとして親しまれている。弁財天は梵語の「サラスヴァティー」の訛で薩羅婆底と音写される。河や池、湖などを含めて水を神格化した女神を意味する言葉である。という。一説には、インドのサラスヴァティ河を神格化したともいわれる。

弁財天の性格は

(一) 学芸の女神

弁財天の出自は、「河川の水」に関係していることから、とうとうと流れる川はよどみない弁舌や音楽を連想させ、弁舌、音楽の女神としての信仰が生まれた。密教の弁財天には、琵琶を持っている姿の像がみられるのも、こうしたことに由来しているのであろう。さらに人々は弁財天の性格を粉飾して、学問の女神、学芸全般にわたる女神として信仰するようになった。

(二) 財福の女神

インドなどにおいては、すでに弁財天は「世界の富を知りて」とか、「富を伴侶とし」とあるように、財富の神としての性格をも有していたという。

従って、学芸の女神の場合は「弁才天」と書き、財富の女神の場合は「弁財天」と書くべきかもしれない。日本においては特に財富の女神として信仰を集めているようである。

(三) 弁財天の形像

弁財天の形像は、いろいろあつて統一はないようであるが、これは宇賀神將と混同された結果であるという説もある。その功德が似ているからであり、弁財天の使者が白蛇であるといわれるのも、宇賀神將と混同されたことから始まった一つの伝説であろう、ともいわれる。

【毘沙門天】

毘沙門とは梵語で「多聞」と訳されている。すべてのことを一切漏らさず聞くことができる大智者を意味する。という。仏教における毘沙門天は、四天王の一人とされ、仏教の世界観によるところの須弥山の北面に住み、閻浮提（人間世界）の北方を守護し、財宝富貴をつかさどり、また、仏法を護持してくれる守護神とされる。七福神にとり入れられては、戦いの神様とされ、正義の味方となってくれる神とされる。

仏教において守護神が信仰される背景にはどのような理由が考えられるであろうか。

仏教といえども現実の世界に存在してゆく以上、為政者の理解なしには存在することは難しい。即ち、人々に税金や賦役を課そうとする為政者にとっては、それが免除される僧侶が増加していくことは、政治上の諸問題をかかえることになる。またインドにおいてはヒンドウー教・バラモン教など異教の侵入に対して、お互いに対応していく必要もあった。仏教は平和を尊重するのであるが、仏教を脅かす異教の侵入を防止しようという願いが、守護神への信仰を生むことになったと思はれる、という。

その形像はというと、左手には三叉戟・宝塔などを持ち、右手は腰に托すか宝棒を執る。脚下には二夜叉鬼或は三夜叉鬼を踏んでいる。顔は忿怒の表情をし、体軀は隆然としている。

左手の宝塔は人々に福德を与え、右手の宝棒は怨敵をくだくことを象徴しているという。

【布袋尊】

布袋（？―九一六）は、七福神の中では唯一実在の人物である。貞明二年（九一六）浙江省奉化県で寂したと伝えられている。本名は契此で、人々からは「布袋さん」と呼ばれて親しまれていたという。

契此が布袋和尚と呼ばれるようになったのは、日頃、手に杖を持ち、大きな布の袋を荷負って歩いていたことによるようである。そして、袋の中には生活必需品一切を入れ、人中にあってはあたりかまわず物を乞い、施しを受けた魚や肉など少しばかり食べては残りを袋のなかに入れて貯えたという。それに一定の住処や生業を持たず、方々を徘徊する浮浪者風の人であったようである。

外見はというと、短小肥満、満面ほほえみを浮べ、頗る大きな太鼓腹を丸出しにしていたという。

このような布袋和尚であるが、人智を超える能力を持ち合せた人物であったようである。人の吉凶禍福や天気を予測して通中しないことはなかったという。

布袋和尚が世を去ると、人びとは競ってその姿態を絵に画いたと伝えられる。数多くの布袋図があるが、大きな布の袋を杖に通して肩にかけ、満面にほほえみを浮かべて闊歩する姿が描かれているのを見ると、大きなお腹、それに何か大層な宝物が入っていそうな布の袋は、一種の福々しさを感じさせずにはおかぬ。

このような布袋和尚のイメージが、福運の神として、七福神の一として祀られる所以であろうという。布袋図を眺めていると、和尚はわれわれに、明日に希望をもって、楽しく生きようではないかと語りかけているようで、なんとなく親しみがもてる人物である。

【福祿寿と寿老人】

福祿寿は、中国の道教で祀る星宿の化身であるという。人命をつかさどるとされる南極星の化身、すなわち南極老人のことであるとされている。その姿は、短身で頭部と胴体の部分の長さがほぼ同じくらいというから、相当な長頭である。また鬚髯をはやしていたというから、現代の老人の姿からも想像できない怪物のような姿であつたらしい。また、「亀を愛し、鶴を懐く」というから、尋常の老人でなかったことはいうまでもない。また福祿寿は泰山府君（中国五山の一つで、山東省にある泰山の神で、人の魂魄を召し、生命の長短を知るをつかさどる。とあるから、人の寿命を司る神とされる。泰山府君は延命長寿を司るばかりでなく、福や祿の神として信じられていたことがわかる）であるとする考えもある。泰山府君も長頭短身にして、その形容、福祿寿に符合せりとあり、先の南極老人の姿と一致しているから、泰山府君をもって、福祿寿となすようになったと考えられるのである。という。

福祿寿像は応永十三年（一四〇六）に將軍義満が五山僧らへ贈与してからのち、他に普及したであろうことが窺える。又將軍義政が寿牌（生前に作る位牌）に福祿寿を書いて氣に入つたと伝えている。長寿を願う人にとって福祿寿の人氣は高いものがあつたと察せられる。こうして福祿寿は、世の人びとの間に延命長寿をつかさどる神として信仰をあつめ、福神として祀られるようになった。という。（七福神より）

さらに福祿寿は「福神・祿神・寿神」の三神を意味するともいわれ、その功德はさらに拡大された。この福祿寿をもって、人徳の神として七福神に加えられるという性格が強い。そのため、純粹に延命寿命をつかさどる神は寿老人であるという。しかし、寿老人は福祿寿と団体異名とされる神である。という。

「七福神考」によると、福祿寿が長頭短身の異形をし、亀や鶴を従えていたのに対し、寿老人は均整のとれた姿の老人で、鹿を従えていたという。一般には、白髪で杖をついた老人の姿で画かれている。鹿は「祿」と音通することによる。従って延命長寿と福祿の神としての性格をもつといわれる。

七福神に選ばれた神々

現在知られている七福神の内訳は、恵比寿、大黒天、弁財天、毘沙門天、布袋、福祿寿、寿老人の七神である。

歴史学者の喜田貞吉氏によれば、七福という考えは佛教の教典にいう「七難即滅、七福即生」、すなわち、この世には人を滅ぼすことになる七つの災厄と、幸せに導く七つの福徳があるという教えにもとづくもので、のちにこの七福の中身を、寿命・有福・人望・清廉・敬愛・威光・大量と解釈するようになされたという。

だが、これはあくまで知識人のレベルの再解釈であって「七仏」「七曜」「七賢人」といったように、「七」を一つのまとまりとする考え方にしたがってなされたものらしい。という。

西宮の戎三郎、比叡山の三面大黒、鞍馬山の毘沙門天などの信仰がさかんだったこともあり、恵比寿、大黒天、毘沙門天の三神が七福神のメンバーになることには、だれも異論がなかったようである。

しかし、残りの四神については異論があり、稲荷神や虚空蔵菩薩、吉祥天、狸々などの名もあがっていたが、当時、人気のあった竹生島の弁才天がそのメンバーに選ばれ、最後の三神として、布袋、福祿寿、寿老人に落ちついたようである。という。

七福神になれなかった神々

前述の三神（布袋・福祿寿・寿老人）を福神にするよりも、稲荷や地蔵、不動、あるいは福助やお多福といった神格を福神としたほうが、ずっと民衆にはわかりやすいかもしれない。

しかし、七福神思想も時代の産物である。その成立当時の時代環境が、前述の七福神構成を生み出し、その後もこれにかわる「新七福神」を生み出して流布させることができなかったために、このメンバー構成が現在までつづいているというわけである。

たとえば、「福助」が「七福神」にはいらなかったのはなぜだろうか。「福助」が福神として登場し、人気を集めたのは江戸時代のことであった。そのときには「七福神」のメンバーはすでに決まってしまったのだ。このため、宮田登氏はこの「福助」を「遅れてきた福神」と評した。

では、今日なお福神的性格をおとろえさせることなく信仰を集めている。「稲荷神」が、「七福神」はいれなかったのはどうしてなのだろうか。いちばんの理由は、竹生島の弁才天が、伏見の稲荷（ダキニ天）と異名同体の神格とする説が流布していたためだと思われる。という説もある。